ハマーンが、息子であるハリーと共にサイド６の今の場所に引っ越してから数年後の事である。シャアの反乱も過去の事となり、その後ハマーンもセイラが遊びに来て背徳な一日を過ごしたり、ジュドーと再会して官能な日々を過ごしたりした事も懐かしく感じられる様になった頃の話である。

ある天気が良い日、彼女の家の呼び鈴を押す男がいた。ハマーンはモニター越しに彼を見たが、今まで会った事が無い男だった。彼女は、インターホン越しに冷静に対応した。もちろん護身用の銃を持って。（注：サイド６では違法であり、見付かると当然処罰される）

「はい。どちらさまでしょうか？」

「初めてお伺いします。私、フリーのジャーナリストをしているカイ・シデンと申します」

「あの…うちにどんなご用でしょうか？」

ハマーンはそう言いながら、銃を構えた。

「はい。実は貴方もご存じの方と思いますが、以前セイラ・マス様とお会いして話をした際に、サイド６に投資で生計を支える凄腕の女性が知り合いにいると言う話をされまして、是非会って取材をしたいという事でお伺いしました。あっ、これがセイラさん…いや、セイラ様からの推薦状です」

ドアのポストに封筒が放り込まれた。ハマーンはそれを手に取るとこう答えた。

「あの…読んでから判断したいと思いますので、少し時間を頂けませんでしょうか？」

「ええ、それで構いません。何でしたら十五分後にまたここへ伺って…という事でも構いませんが…この辺は私が住んでいたサイド７の風景と似てますので、しばらく散歩してますから…」

「えっ？あ…そうして頂けると助かりますわ」
「判りました…では一端失礼します」
カイは帽子を取って軽く会釈をすると、来た道を引き返していった。それを見届けた後、ハマーンは封筒を見た。裏のサインは確かにセイラ…では無く「アルテイシア・ソム・ダイクン」名義で書かれてあり、表の宛名は彼女の偽名のアルテイシアでは無く「親愛なるハマーン・カーンへ」と記述されていた。ハマーンは封を切り、中の文章を読んだ。以下はその文章である。
『私の義妹であり、良き理解者であるハマーン。以前お会いして以来ご無沙汰していますが、貴方は貴方で充実した人生を過ごしていると思います。私の方も新しく始めた事業が何とか軌道に乗り、やっと余裕がある生活を送る事が出来るようになりました。近々娘のソニアと共に遊びに行こうと思ってますので、その時はまた色々と楽しみましょうね。さて、挨拶はこれ位にして本題なのですが、実は今回この手紙を貴方に渡した男性は、ホワイトベースに私と一緒に乗っていたカイ・シデンという男で、今はフリーライターとして生計を立てている人間です。私が貴方の事を話したのは、彼が信頼出来る戦友…いえ、友人だという事、そして一年戦争から続くこの戦乱の真相を、一個人として興味を持って調べたいという事、そして戦いの後消息を絶ったシャアとアムロの事を調査してある程度情報を持っていいる事…そしてそれを私が、兄を心から愛している貴方に知って貰いたいと思った事…それらが重なり、今回私からの頼みでそちらへ行って貰う事にしました。もし貴方が、彼自身を信頼出来ない人間だと思った場合は、会わなくても良いと言ってますし、場合によっては敵国の人間、それもホワイトベースのクルーだった人ですから、殺されても仕方が無いという覚悟でそちらに行くと言ってます。どうか、彼を

信じて、話せる事だけで構わないので貴方の事、兄の事を彼に伝えて下さい。そして、兄とアムロの事も直接彼の口から聞いて下さい。二人と関係を持ち、二人と信頼し合った貴方には、それだけの権利があると思いますから…。では、お体を大切にね…。セイラ・マスより』

ハマーンはその手紙を読み終えると、しばらくの間目をつむって無言のまま佇んだ。セイラ直筆の紹介状を持つ男であり、私の素性をよく知る彼女があえてリスクを負う可能性があっても私に会わせたいと思うからには、私自身にとってもかなり有益な情報を持っている人なのであろう。ただ、私にとって今一番重要な事は、シャアとの愛の結晶であるハリーを一人前になるまで育てる事であり、率先して他の事を優先する気にはなれなかった。どうすればいいのか…と彼女が思っていた時、彼が再びやって来るのが窓から見えた。そして、カイが呼び鈴を鳴らすと彼女は一瞬躊躇しながらも、インターホンでは答えずにドアの鍵を外し、彼を中へと招き入れた。カイは帽子を取って軽く会釈をすると、ハマーンに導かれるまま居間に歩いて行った。そして指定された椅子に座った時、ハマーンが軽く声を掛けた。

「お飲み物はコーヒーと紅茶、どちらにします？」

「えっ！？」

思ってもいなかった言葉に驚くカイ。ハマーンは彼に軽く微笑みながら答えた。

「わざわざこんな所まで来て下さった方に、お茶の一杯も出さないなんて失礼ですもの。私への質問はその後でも構いませんでしょうか？」

「はっ、はい。勿論です」

「では、コーヒーだとベトナム産、紅茶だとスリランカ産のがあるのですが、どちらにしますか？」

「じゃあコーヒーで…」
「はい」
ハマーンはそう答えると、古式なベトナムコーヒー専用のフィルターを二つとベトナムコーヒーの袋とコンデンスミルクを用意した。どうやら本格的な物を作ろうとしてるらしかった。台所ではハマーンがヤカンのお湯が沸くのを楽しそうに待っていた。時折鼻歌も居間の方まで聞こえてきたが、カイにはこの女性がかつて「ネオ・ジオンの魔女」とまで言われたハマーンと同一人物とは、とても思えなかった。月日が人を変える事は判っていても、体を覆い尽くす気配までは変える事は出来ない。いや、仮に隠す事は出来ても、本来持っている気配は必ずと言っていい程どこかに現れてくるのである。カイはニュータイプではないが、その事に敏感だった為に、これまで数多くの死線を越えて生きてきたのである。
やがてハマーンはお湯が沸いたポットを持ってきて、コーヒーの準備を終えると、そっとお湯を注いだ。
「こんな感じでベトナムコーヒーを飲んだ事は？」
「いえ…無いですね」
「そう。このタイプはお湯が落ちるまで時間がかかりますから…。それとコンデンスミルクは砂糖の代わりなんでお好みで入れて下さい」
そして、ゆったりとした時間がしばらくの間続いた。都会とは違い周辺で響く騒音も無く、まるで地球の片田舎で暮らしている様な感じだった。やがて、一息付いた所で、カイがおもむろに話しかけた。
「今回…いきなりの訪問になってしまって、本当に申し訳ありません。事前に手紙や電話という手段を

使う事も考えたのですが…こういうご時世ですから、どこで盗聴や閲覧されるか判りませんので…。私も地球連邦にとっては、余り好ましく思われてないものでして…」
「フリーのジャーナリストという事でしたが、どんな事を書かれているのですか？」
「生活する為の一般的な記事や、軍関係の提灯記事まで様々ですね。もっとも趣味では一年戦争やグリプス戦争の事を取材してますけど」
「義姉とはどの様なご関係で…？」
「セイラさんとは地球連邦軍の同じ部隊に所属していた関係で、判りやすく言えば戦友…という事になりますね。それに一年戦争後も、縁があって交流は続いてましたし…」
「では、義姉さんの子供の事もご存じで…？」
「ソニアちゃんの事ですね。ええ、知ってますよ。セイラさんに似た可愛いい顔をしてますが、どことなくアムロの面影もあるので、時々ドキッとしますけど」
「では、ソニアの父親の事も知ってるのですね」
「はい。セイラさんに堅く口止めされていたので、私が他人に話す事は無かったのですが…。でも自分の子供では無いにしろ、ずっと成長を見守っていますと、何だか情が沸いてくると言うか…」
「ふふっ、それは微笑ましいですね。でも義姉は真面目な人を見ると少し意地悪をしたくなる性格みたいなので、誘惑みたいな事は結構されたのではないでしょうか？」
「ええ、よくお判りで…。でも私達の間では挨拶みたいなものですから…。それに、私の彼女を思う気持ちなんて、セイラさんがアムロの事を思う気持ちに比べたら…話になりませんよ」

「そう…ですか…。義姉さんも、私と同じ境遇なんですものね…」
ハマーンは少し寂しい気持ちになった。セイラも自分も、好きな人の子を宿し、育ててはいるが、好きな人の側にいる事は決して出来ない…。それはもう何十回も考えた事であるし、自分の中では結論は出ているのだが、それでも時々思い出しては切なくなる時があるのもまた事実だった。やがて、カイの方からポツリと呟いた。
「私の方の話はこれ位にして…本題に移りましょうか」
「え？ああ、そうでしたね。セイラ義姉さん絡みの話となると嬉しくてつい…。で、今日は私…投資家で実業家の肩書きを持つアルテイシア・マイネに御用なのでしょうか？それとも…とっくに捨てた昔の名前の方に御用なのでしょうか？アクシズ…いえ、ネオ・ジオンの時の名前の方に…」
ハマーンの言葉に、カイは一瞬顔をこわばらせながらも、目を見てこう言うのだった。
「では、貴方は本当に…」
「ええ、確かに…私は元ネオ・ジオン摂政、ハマーン・カーンです」
にこやかに答えるハマーン。そこには過去の人を恐怖に陥れるような殺気は微塵も漂ってはいなかった。
「…」
「どうかしましたか？例えば、私を捕まえる計画でも考えていらっしゃるとか？」
「そんな事…私にはそんな権限はありませんし、第一『ハマーン・カーン』という女性は公式に死んだ事として記録されています。つまり、死んだ人間をどうして捕まえる事が出来るでしょうか？ましてや

連邦の法律が適用されないこの地において…」
「確かにその通りですわ。シャアのように表舞台へ舞い戻るのならまだしも、私はこのコロニーから出る気はありませんもの」
「では、一生をここで終える…と？」
「ええ、もう私の『公人』としての役目は終わりましたから…。後は次の世代の子供達の出番でしょう。ミネバ様は何か行動してらっしゃるみたいですが、もう私があれこれ指図をして動く事は決してありませんわ」
「なる程…ちょっと失礼…」
カイはそう答えると、手帳に今の会話の概要をメモし始めた。そして要点をまとめた後に、カイは再び口を開いた。
「あの…ハマーン・カーンだと私が理解した上で、更に幾つか質問したいのですが…」
「それは構いませんが、貴方は…」
「あ、カイと呼んで下さって結構です」
「…カイさんは、私の事を聞いて、一体どうされるつもりでしょうか？今更私の話を本にして公表した所で、貴方にメリットがあるとは思えないですし、逆に思想犯としてマークされる可能性も充分あり得ますわ」
彼女の言葉に、カイはコーヒーを飲み、一瞬間を置いた後に口を開いた。
「ハマーンさん」

「は、はい」
「少し失礼な聞き方になるのを承知でお伺いしますが…貴方がアクシズ…いや、ネオ・ジオンを率いて戦った事は、正しい戦いだったと思われますか？」
「それは…私の地球圏での戦いが『正義』の戦いだったのか…と、おっしゃりたいのでしょうか？」
「率直に言えば…そういう事です」
「ふふっ、私にその様な事を聞いてきた人間は、貴方が初めてですわ」
「そう…でしょうね。私も今だからこそ質問出来る事だと思ってます。貴方が現役だった頃だったら、とても聞けない質問ですね」
「ええ、私の立場上、問答無用で射殺したと思いますわ。ふふっ」
その言葉の直後、カイは一瞬ヒヤリとした気配を感じた。本当とも冗談とも言えない話をした後、彼女は一端間を置いてから、優しい口調で話し始めた。
「戦争は…正常な人間を狂気へと駆り立てます。一年戦争で敗北した我々ジオンは、その後連邦に反撃する事のみを生きる糧として暮らしてきました。私自身は投降を拒否してアステロイドベルトへ撤退した組織にいたのですが、連邦に投降するべきだという意見が全く無かった訳ではありません。でも後に、連邦へ投降したジオンの同胞が、むごたらしい扱いを受けたかという事が我々の耳へ届くにつれて、それらの意見は徐々に消えていきました。カイさんも、ジャーナリストでしたら、その辺はお詳しいのではないでしょうか？」
「ええ…。それは…まぁ…」

歯切れの悪い口調で答えるカイ。実際、一年戦争後に『公式発表』された記録の中には、明らかに連邦側の報復的な行動による強制捜査、逮捕、虐殺、鎮圧と思われるモノも少なからず含まれており、非公式の情報も含めると、一体どれ程の数になるか見当も付かないレベルだった。ただ、この中にはジオンのスパイと解釈された者達（後のエゥーゴとなる者達）も含まれていた為、厳密な情報とも言えない部分があるのも事実だった。

また現在は地球圏を全て勢力下に納めているのは『地球連邦』なのだが、実態はサイド３、６という事実上独立している地域がある上に、『点』でしか制圧していない地域も多数存在している…というのが現状だった。

下を向いているカイに向かって、ハマーンは淡々と話を続けた。

「連邦には連邦の正義がある様に、我々ジオンにもジオンの正義があります。もし一定数の犠牲が出るのを覚悟したとしても人類が恒久的に平和な世の中を迎える事が出来るのなら、それは人類全体にとっても良い事だと私自身は今でも思っています。それは地球連邦の統治によって小規模の紛争を延々と繰り返す世の中よりも遙かに有意義な事であると思ったからこそ…我々はジオンを支持し、そしてネオ・ジオンを擁立して戦ったのです」

ハマーンの毅然とした物言いに、カイは一端軽く間を取った後で答えた。

「お気に障ったら申し訳無いのですが、貴方がアステロイドベルトから地球圏へ戻ってきて行った事は、貴方が地球の支配者になろうとした為、またはザビ家が地球圏を支配する為だけでは無かった…と、いう事なのでしょうか？」

「ふふっ…。確かに私は大衆の前では『ザビ家復興による地球圏の支配』という目標を立てて行動していたのは事実です。でも、それはあくまでも建前で、本音は『ニュータイプによる地球圏の統治』への布石となる予定でした。ですから、ミネバ様はその象徴として君臨し、統治するのはシャアの様な選ばれた者が行えばいいと思っていました。ただ誤算は、シャアが私の考えを拒絶した事なのですが、それでも一端回り始めた歯車を止める事は、指導者である私ですらも止める事は出来ませんでした。それならば、私は自分が出来る所まで突き進み、後に続く者…それは私としてはシャアだと確信してましたが…に道を作る事だけでもと思い、行動していました。実際当時の我々の戦力では、ダカールを制圧した時点でもう精一杯でしたから…。その後はどれだけ敗戦までの時間を引き延ばす事が出来るかだけを考えてました。でも、その途中で内乱が起きてしまい、大幅に戦力を失った状態では、もう戦略的な事は…何も出来ませんでしたけど…」

ハマーンは更に話を続けた。

「そして、私はエゥーゴ…ガンダムＺＺのパイロットであるジュドー・アーシタとの対戦を希望し、戦いに敗れた私はキュベレィのコックピットで人生を終えるはずだったのですが、外していた筈の脱出装置が作動して生き残り、その状況をずっと見ていたシャアによって救出されたのです。当初は生き恥を晒してまで…とも思いましたが、彼が私の行動を認めてくれてた事で、私はそれまでの重荷から解放された気分になりました。そして、今度は私が彼の行う事を最後まで見届けようと思うに至ったのです」

「それなら、彼…シャアと共に戦うという選択肢は無かったのですか？」

その言葉に、ハマーンは一瞬寂しそうな目をした後に答えた。

「私にその気が無かった…というと嘘になります。私も出来る事なら彼の側にいて、彼を助けてあげたかったのですが、その役には私の全てを教え込んだナナイという女性がおりましたし、しばらくして彼…シャアの子を身籠もっているのが判ったので…。それで彼と話し合って、お腹の中の子には、ジオンの柵を課せる事無く育ててあげようという事になり、私は単身サイド６に移住し、戸籍を買ってここに住み始めた…それが私、アルテイシア・マイネという存在なのです」

一瞬の沈黙が辺りを覆った。ハマーンは無言でカイのコーヒーを注ぎ足した。それを数口飲んだ後にカイがようやく口を開いた。

「貴方の話を聞いてますと、ジオンの側で戦った人達の気持ちが本当に良く判ります。もし私がジオンの人間として生まれたのなら、例え成り行きであっても銃を取って戦った事でしょうね」

「ふふっ。今はもう何も影響力の無い私ですが、その言葉はとても嬉しく思います。志半ばで亡くなっていった者達も、きっと浮かばれる事でしょう」

そう言ったハマーンは、とても澄んだ目をして窓の外を見ていた。その表情をしばらく眺めているカイだったが、やがてハマーンがその事に気付き、そっと顔に手を当てた。

「…何か？」

「す…すいません。記録映像で観る貴方の表情よりも、今の方がずっと素敵ですね」

「でも私、一児の母ですわ。もう昔のような肌の艶も無いですし…」

「いえいえ、今でもとっても魅力的ですよ」

「何でしたら、実際に触って試してみますか？ひょっとしたら、私のもっと深い内面を感じる事が出来

るかもしれませんよ」
　本気とも、冗談とも取れるような感じでハマーンは言った。それに対して、カイは両手で胸の前に出してこう答えた。
「それは…遠慮しておきます。もちろんそれはとても光栄な事だとは思いますが、深く関わってしまうと、どうしても情が沸いてしまいますので、ライターとして公平な判断が出来なくなってしまいますから…」
「なる程、それは…ごもっともな話です。こちらの方こそ軽はずみな事を言いまして済みませんでした」
「いえ、言って下さった事に関しては光栄に思ってます。それは多少なりともですが貴方に認められたって事でしょうから…」
「ふふっ、そうですね。…ところで、貴方とセイラ義姉さんとの関係をもう一度お聞かせ下さいませんか？」
　カイは一瞬躊躇したが、やがてとても優しそうな表情をしながら語り始めた。
「判りました。セイラさん…彼女とは一年戦争の時に、同じ部隊…もっと詳しく言えば一緒の船に乗ってた間柄です」
「一緒の船という事は、木馬…いえ、ホワイトベースに…ですか？」
「ええ、そうです。私も一応ＭＳに乗りだったんですよ」
「やはり、ガンダムに乗ってたのですか？」
「あれは実質アムロの専用機でしたし、正確に言いますと、あの船にガンダムタイプは一機しか積んで

ませんでした。私はそれの前に作られたガンキャノンという肩に砲塔が付いている支援タイプのＭＳ乗りでしたが、腕は…ふふっアムロに遠く及びませんでしたね。でも、化け物みたいな能力を持っていても、私達とは距離を置かずに接してくれた…それが嬉しかったり、時にはその行動が辛かったりと…。でも、今でもあいつとは仲の良い友達だと思ってます…アムロが俺をどう思ってるかは判りませんけどね…」

「それは…大丈夫だと思います。彼とは縁あって…その…何と言うか…肉体関係を持ってしまいましたので…心の奥底でも繋がり合いましたから…。その…出会った友達を大切にする性格ですから」

「え？…そうですか…。その…二人の間に関係があったと言うのも驚きなのですが…アムロと会った事があるというのは初耳です。公式的にはそんな記録は残ってないですし、彼と何度か会った際にもそんな事は一切聞いた事が無いのですが…」

「…でしょうね…彼は付き合っていた女性の事をとても愛しく語ってましたから……自分からは決して話すような事はしないでしょうね…」

カイはそれを聞いて、一瞬躊躇したが思い切ってこう言い放った。

「あの…差し障りなければ、その経緯を聞かせて貰えませんか？あ…もちろんこの事は一切記事には致しませんので…」

一瞬躊躇するハマーン。だが、意を決してこう答えた。

「判りました。でも仮に記事にした所で、誰も信じてはくれないと思いますよ。ふふっ」

そう言い終わると、過去を思い出すような感じで話し始めた。

「あれは…我々のネオ・ジオンがダカールを占領した後、私は非公式にサイド６にて連邦に縁のある方々に、協力と停戦への仲介を打診した時、偶然彼と出会いました。ただ、その時の私は彼に『アルテイシア』と名乗ってましたので、最後まで私の事をハマーンだとは知らなかった筈です」

そう言い終わると、ハマーンの頬が少し赤く染まった。カイはそれをあえて見なかった様に振る舞いながら言った。

「アムロの父の墓がサイド６の…このコロニーにあるという話は、私も情報として知ってましたが、まさか貴方がこのコロニーでアムロと接触していたというのは、意外でしたし面白いエピソードですね。貴方から見てアムロはどういう男性でしたか？」

「相手の事を思いやる、とても優しい人でしたわ。もし私がシャアよりも早くあの方と出会っていたら、一緒に夢を見たいと思った…筈です」

「彼の友達の一人として、敵側だった貴方にそこまで気に入られるというのは、とても羨ましくもありますし、それと同じ位嬉しくもあります。何だかんだで彼とは長い付き合いですからね」

とぼけた様な口調でカイが言うと、部屋には一瞬会話が途切れた。やがてカイがポツリと呟いた。

「実は…公式には行方不明となっているアムロなのですが、貴方と同じように救出されています。ただ軍には極秘にしていますので、彼の妻であるベルトーチカにも報告していない…というか、まだ報告出来ない状態だというのが正直な所です」

「それは…どういう事ですか？」

「戦闘時の後遺症で、救出されてから未だに意識が戻らないのです。ただ、脳死と言う訳では無いので、

いずれは目が覚める時が来るかもという事なのですが、それがいつになるかも判りませんし、医者の話では目覚めても意識障害や、重度の機能障害が出る可能性が高いという話も…」
「そうなのですか…では、シャアの消息は…」
その言葉に、カイの表情が曇った。
「残念ながら、世間での公表の通り生死不明です。最後に確認された脱出ポットすら発見されてませんが、大気圏で燃え尽きたという報告もありません。残念ながらこれが精一杯の情報です」
「…」
「もっと私の情報網が広ければ…」
「いえ…私が持っているジオンのネットワークを駆使しても、彼の消息は残念ながら得る事が出来なかったのですから、仕方が無い事です。でも、それが悪い方向へ向かわなければ良いのですが…」
「どういう事ですか？」
「私のように、生きていたとしても死亡と認定されたならまだしも、逆の場合はそれを利用して。あたかも『シャアがそこにいて影響力を示している』という演出をする事が可能な訳です。そして、全ての責任を彼に押し付ける事も…可能でしょうね」
「やろうと思えば出来る…いや、誰かがやるでしょう。私名前は利用価値すら無いと思いますか、彼の名は今の時代でも十分影響力がありますもの…」
窓から見える遠くの景色を眺めながら、ハマーンはふと溜息を付いた。それを横目で見つつ、カイはコーヒーを一口飲んで口の潤いを回復させてから呟くように言った。

「やっぱり、政治の表舞台に戻りたいですか？」
その言葉に、若干の驚きを見せて答えるハマーン。
「え？私が…ですか？」
「はい。私は当時貴方と敵対する勢力にいた訳ですが、少ない戦力、練度が低い兵を最大限に使い切る能力、そして何よりもダカールを電撃的に無血占領した功績は、今はともかく後世ではもっと評価されても良い筈ですからね」
「それは、私を買いかぶり過ぎです。私の外に誰もアクシズを率いる人材がいなかったからこそ、私が代表になった訳で、それまでの過程も決して誇れる物ではありません。それに、私は単にシャアの側にいて、共に夢を見たかっただけなのですから…」
彼女がそう言い終わると、カイは一息付いた後にこう答えた。
「貴方のプライベートな事に関して…少し調べさせて頂いたのですが…ここでその事に関して幾つか質問してもよろしいでしょうか？」
「ええ、昔の私ならともかく、今の私には隠す事自体無意味ですから…」
ハマーンはそう答えながらも、心臓が高鳴るのを感じていた。やはり、自分の過去を話されるのは、抵抗があるような感じだった。
「貴方とシャアは、アクシズで共にいた時は、かなり深い間柄だったという話ですが…それは、事実なのでしょうか？」
「はい。体を許し合える程の仲でしたが、普通の関係では済まなかった事まで調査済みなのですか？」

「は…はい。申し訳ないと思いながらも…その…何と言うか…」
焦るカイに向かって、ハマーンはこう代弁した。
「シャアがご主人様で、私が彼の奴隷…主従関係を結んでいた…と言う事ですか？」
「えっ？ええ…その…そういう調査結果が出ているのですが、その真相に関しては…」
「はい。調査通り事実ですし、今でも私のご主人様で最愛の人はシャアだけですわ。その証拠に乳首とラビアには、彼との主従の契りを結んだ証にリングが付いてますわ。何でしたら御覧になりますか？」
「いっ！いえっ！結構です！はいっ！」
「ふふっ！」
今までのフリーライターとして話していた顔が、まるで少年時代のような表情で顔を赤らめて言い放つ彼の姿に、ハマーンは思わず笑ってしまった。そして、こう答えるのだった。
「貴方は…本当に信頼出来る方のようですね」
「私が？…ですか？」
「はい。なぜなら貴方の心には、邪な心が一切無いのが判りますので…」
「それはやはり、ニュータイプとしての力…なのですか？」
「少なくとも貴方は、私を連邦に売ったり、私の過去をスキャンダラスに書くような事はなさらないのでしょ？」
「ええ、私はあの時代の戦いを公平な目で見て判断し、記録として残したいだけなのです。もちろんその為には、貴方とシャアが恋仲だったという事には触れざるを得ませんが、それ以上の激しい行為に関

しては、あくまでもプライベートな事であり、それを知ったからと言って公表する事は決してありませんし、仮に知っていたとしても私自身はそれを墓場まで持って行く覚悟ですよ」
「ふふっ、『墓場まで持って行く』…ですか。その言葉はアムロも言ってましたわ」
「ふっ、本当ですか！？…せっかく良い言葉だと思ったのですが、あいつに先を越されてる…いつもこんな感じですよ」
「ふふっ」
そう言うと、ハマーンは話題を変えて話を続けた。
「ところで…義姉への貴方の想いもそんな感じなのですか？」
「えっ？」
「私がアムロから聞いた情報では、まんざらでも無いという事でしたが…それとも誰か心に決めた方がいらっしゃるのかしら？」
「て…手厳しい質問ですね。こんな仕事をしていますから、女性との接点も多いですけど、残念ながらセイラさんよりも素敵な人には巡り会えていないというのが現実ですね」
「では、今でもセイラ義姉さんの事はどう思ってらっしゃるのですか？」
「そうですね…誰か素敵な人と幸せになって欲しいとは思ってますが…」
その言葉を聞いて、ハマーンはこう言った。
「なら、カイさん…貴方が幸せにしてあげるというのはどうなのですか？」
その言葉に、一瞬顔を赤らめながら応えるカイ。

「わっ、私はセイラさんとは…一生親しい間柄でいられれば充分ですよ。そんな大層な事…考えた事もありませんよ…ははっ…」
「そうかしら？貴方程の人が側にいて下さったら、きっと義姉も今まで以上に幸せになると思うのですが…。それとも、義姉にアムロとの子供がいるのが嫌なのですか？」
その言葉にカイは大きく首を振って応えた。
「いえ、アムロとの子供でしたら逆に喜んで育てます。あいつには沢山借りがありますからね。ただ、私の方も独身ではあるのですが二人の子供を養ってますから…そういう経済的な事情もあって…」
その言葉に、ハマーンは少し驚いた口調で応えた。
「子供を…？それは…私としてはとっても興味がある話ですわ。是非お聞かせ下さいな」
ハマーンの目が、噂好きの女性の目になっていたのを、カイは鋭く見抜いた。
「ふふっ、私の間に前にいる貴方は、ネオ・ジオンを率いていた女傑な筈ですが、今の貴方はその辺にいる噂好きの女性と変わりませんね」
「あ…こういう生活をしていますと、どうしても刺激が少ないもので…。やはり義姉と同じで戦争中に出来た子供…ですか？」
「いや…そういう訳では無くて…血の繋がりはないのですが…『縁』というか　…」
カイはそう答えた後、一呼吸置いてからゆっくりと話し始めた。
「実は私、途中停泊した港で一度ホワイトベースを降りてるんですよ」
「それは、除隊…という事ですか？」

「はい。結局はその翌日にジオンの襲撃がありまして、船に戻って戦ってしまったのでうやむやになったのですが、その短い休暇のような間に知り合った娘の弟と妹なんです」
「で、その女性は？」
「残念ながらその後の戦闘中に…亡くなりました。ジオンのスパイとして活動してたらしいのですが、命令でホワイトベースに潜入して、私の出撃に同行して、その時に…」
「そう…ですか」
一瞬の沈黙が辺りを包んだ。やがて、カイがぽつりと話し始めた。
「彼女…私が船を降りた時に物売りをしてましてね、ゲートから出た私に近寄ってきて、泊まる所が無いなら自分の所へ泊まりなさいと言ってくれたんですよ」
「ふふっ。親切と言えば…そうなのでしょうが、このご時世ですから裏がありそうな話ですね」
「さすがですね。常識的に考えれば、見ず知らずの男を家に呼ぶという事などあり得ません。あるとすれば…」
「たぶん、体を売る商売か、宗教家か、詐欺師…あとはスパイ位ではないでしょうか？」
「ええ、私もそう思います」
「で、それを覚悟で付いて行ったのですか？」
「もちろん」
「リスクを承知の上で？」
「何というか…その時の私は、人に騙されてもいいかという位自暴自棄になってました。たぶん極限状

態の連続だったので、精神的に限界だったんだと思います」
　そう言うと、カイはコーヒーを飲んで一呼吸置いてから話を続けた。
「私を家に泊めた理由が、生活費を稼ぐ為に体を売りたかったからというのは、彼女の家に着いて彼女の雰囲気から直ぐに判りました。そして、その際に連邦軍の情報を得ようとしていた事も…ね」
「それを知ってて彼女と寝たのですね」
「いえ、残念ながら…」
「あら？そんな状況で寝てあげないなんて、それを生業にしてる人に対して可愛そうな気もしますわ」
「ええ、私もそう思います。なので、ホワイトベースの情報…まぁ、いつ出航するか程度ですが…を教えてあげましたよ」
「その娘さん…貴方の好みじゃなかったのかしら？」
「いえ、そんな事はありませんでした。戦争が無かったら、地方の素朴な田舎娘として幸せに暮らしていた事でしょうし、私はそういうタイプの女性に心惹かれるんですよ。だからこそ、心を通わせないで寝る事は出来なかった…若い時のプライドってヤツですかね」
「ふふっ。その気持ち、良く判りますわ。じゃあ、彼女が亡くなるまで何もしなかったのですか？」
「いや、その時は何も無かったのですが…ホワイトベース内で彼女を見付けた際に成り行きで匿ったのですが…その際にその…」
　カイは当時を思い出しながら、気恥ずかしそうに答えた。
「若い男女が一緒の部屋で、しかも極限状態の中ででしたら…もうお盛んだったのではないでしょう

か？」
「ええ、飯の時と出撃の時以外はずっと…。彼女は『何にもお礼出来ないから…』と言ってましたが、内心不安な気持ちで一杯だったんでしょうし、私もあの頃は連日の戦闘で疲れ切ってましたから…お互いそれを紛らわす為もあったのでしょうが、体力が続く限りセックスに没頭してましたね。今思うとよくあんなに出来たなと思うのですが…」
「ふふっ。私もアステロイドベルトにいた際、シャアとはセックス漬けの毎日でしたから…お気持ちは良く判りますわ」
「シャア…赤い彗星と…ですか？」
「ええ。彼は私を女にしてくれた上に様々な調教を私の体に覚えさせた男です。それに…私は彼と永遠の主従の契りを交わした間柄ですから、彼が求める事は私が行わなければならない行為として日々を過ごしてきました。通常のセックスは勿論の事、精神が壊れる寸前のハードなプレイまでありとあらゆる事を行いましたわ。公になれば失脚する様な事も…ね。ただ、そういう関係と政治的な事は別な話なので、グリプス戦では敵同士として対する事になりました。あれは、今思い出しても本当に胸が張り裂ける位に切なく、苦しい日々でした」
「そ…そうですか…」
懐かしそうに話すハマーンに、カイはどう答えていいか判らず、愛想笑いをしてその場を濁した。
「ふふっ。優秀なパイロットや指導者は、普段の生活も清廉潔白で皆の模範となる存在だと思ってましたか？」

「えっ？そ…そんな事は…」
「私もシャアも、世間で言われてる程人間が出来ている訳でも、冷酷な訳でもありませんわ。他の人と同じように悩み、苦しみ、心の糸が切れないよう必死にその日その日を生きてきただけです。そして、上に立つ者としてそのような弱みは決して出さないように努めていました。…それが更に自分の心を壊していくのですけど…ね」
「連邦が貴方の事を引用する際に必ず付ける『冷酷で非道な悪女』という肩書きも、虚像に過ぎないという事ですか？」
「いえ。それも私ですし、その肩書き自体は否定しません。それに、私は戦争で負けた訳ですから、勝った側に何を言われようとも仕方が無いと思ってます。ただ…もし私が勝っていたら…そんな事を書いた人間は粛正ものですけど…ね。ふふっ…」
そう言いながら、ニコッと笑うハマーン。カイもその言葉はジュークだと判るのだが、どこか不自然に笑って答えた。そして、カイは話題を逸らすように話しかけた。
「そう言えば、今はどの様な感じで生計を立てているのですか？」
「シャアからの援助金がありましたし、ここへ移り住んでからは義姉と同じ様に株で生計を立てている感じです」
「デイトレーダー…という訳ですね？」
「ええ…私自身は義姉と違ってそれ程上手くも無いのですが、ニュータイプの能力を少し使えば人より早く売り抜けるのは造作も無い事ですから」

「その通りだとしたら、いずれ人類がニュータイプへと進化したら、株式市場そのものが存在出来なくなりますね」
「それはどうでしょうか？全員が同じ能力を持っているとしたら、それは無いのと同じ事になりますから、いずれは同じ様な感じへと収束していくのではないでしょうか？」
「なるほどね…」
「それと…そう言えばカイさんは、ジオン系の住民が仕事に就く際、不当に差別されているという事は御存知でしょうか？」
「ええ、こんな仕事をしてますからそれなりには…。表向きはそういう事は無い事になっていますが、調査すればそんな事は一目瞭然ですからね。それに仕事と言っても低賃金の肉体労働だったり、または風俗関係だったりと偏っているという事実もデーターとして表れてますね」
「残念ながらその通りです。そして、この不満はいずれ大きな流れとして渦を巻き、やがて再び戦争の火種となる事でしょうね…」
「ええ…私もそう思います」
　重苦しい空気が辺りを支配した。ハマーンはそれを察すると、スッと立ち上がり、戸棚からグラスとジンを取り出した。
「アルコールは…いける口ですか？」
「まぁ…少しでしたら…それにしても随分強いお酒を飲むのですね」
「ええ。体を壊してしまうので程々にしてますが、シャアに初めて飲まされたお酒がこれだったので…」

「こんなお酒を女性に飲ませるなんて、下心が無ければ出来ませんけどね」
「ふふっ。実は彼、アストロイドベルトに着いた頃、身も心もボロボロで、その上女性に飢えていたので誰でも良かったみたい。酔って彼の体に触れた時、『ああ、この人私の体が欲しいんだな…』って判ったので…。それに私もシャアになら身も心も捧げたいと思ってましたので…あとは…想像に任せます」
　恥ずかしそうに、しかしとても懐かしそうに自らの初体験の話すハマーン。カイはそれを黙って聞いた後、羨ましそうに、しかし無言でグラスの酒を飲み干した。その後二人は政治的な話よりも、他愛の無い世間話や身近な話や、カイが取材先で見た景色の話、そして一年戦争の頃のセイラの話等に終始した。この光景は取材と言うよりも、古い友達が遊びに来たという感じであった。そして、しばらくした頃、酒に酔ったハマーンが下を向きながらポツリと話し始めた。
「カイさん…貴方方連邦の人間から見た場合、ザビ家という存在はどんな感じに思えますか？」
「私が？ですか？」
「ええ…」
「では、逆にどんな感じに思ってるように見えます？」
　巧みに話を切り返すカイ。ハマーンはそんな彼に一瞬微笑みを浮かべてこう答えた。
「そうですね…シャアの父を暗殺して政治基盤を乗っ取った存在で、なおかつ独立戦争を引き起こして人類の半分以上を殺した存在…と、いう所でしょうか？」
「まぁ…世間一般的な感じとしてはそうですね…。ただ、残された資料…廃棄処分を逃れた資料と言った方が良いのでしょうが…を見ると、かなり印象が違うみたいですね」

「それは、どういう感じで？」
「何というか…まずシャアの父…ジオン・ダイクンのイメージが世間一般で伝えられているイメージとは正反対だと言う事です。そしてその暴走を止めていたのがデギン・ザビだったという…」
ハマーンは、その話を聞きながらグラスの酒を飲み干すと、やるせない表情をしながらうつむいて話し始めた。
「シャア・アズナブル…いや、キャスバル・ダイクンの父、ジオン・ダイクンは、確かに優れた思想家だったと思います。勿論私は父やデギン様から間接的に話を聞いただけなのですが…。ただ、その考え方が現実から隔離していて民衆を惹き付けるカリスマ性はあるものの、それをどう実行していけば良いのかという所が全くない人だったそうですわ」
「それは…初耳です。残された文献でも、そういう事が書かれてあるものは無かったですね」
「だと思います。彼の負の面を見せないように演出し、彼を説得し、時には対立候補との交渉や汚れ仕事、その他一切の渉外活動を請け負っていたのがデギン・ザビとその一派だったと言われています」
「では、世間的にはジオン・ダイクンはデギン・ザビに暗殺されたという噂…いわゆる権力闘争ではないのかと言われてますが、その辺はどうなのですか？」
「私はどちらかと言えばザビ家寄りの人間ですから、どうしてもそちら側の方に偏りがちになりますか…それでもよろしいですか？」
「所属していた組織が主観になるのは私も同じです。好きとか嫌いとかを抜きにしても…」
カイはそう答えると、グラスにそっと口を付けた。ハマーンはその言葉に少し安心しながら話を続け

た。
「カイさんは本当に優しい方なのですね…。私の父…マハラジャ・カーンはジオン・ダイクン様とデギン・ザビ様のどちらとも親交が厚く、それゆえに二人の間を取り持つ役目をしていたと言ってました。でも、そうは言っても二人ともお互いの長所、短所を良く知っていた間柄だったそうで、意見が対立する事もそうそう無かったという事でしたが…」
「それは…興味深い話ですね。文献ではデギン・ザビがジオン・ダイクンを暗殺したという結論でほぼ一致していますが…」
「その件に関しては…デギン様自身が『私が殺したようなもんだ…』と話してます。…表で理想的な政治活動を繰り広げるジオン様とは対照的に、デギン様は組織の資金集めや反対勢力の懐柔…もちろん強制的な事も含めてなのですが…そんな裏方の汚れ役を主に引き受け、それを全うしていながらもジオン様のシンパには冷ややかな目で見られていたとあっては、彼と共に行動しているシンパ達が暴走したとしても…やむを得ない様な状況だったと聞きます」
「デギン・ザビとジオン・ダイクンの仲が、世間で言われるような関係では無かったと言う事ですか？」
「ええ。むしろデギン様はジオン様との会話で、過激な思想の部分を言わないように私の父と共に説得していたとも聞いています」
「ほう。具体的にどんな事ですか？」
「『人の革新の為には地球から人がいなくなる事が必要だ』とか『旧人類は新人類の糧となるべきである』とか…シャアやギレン様が行った様な事は既に唱えられていたという話です」

「…」
「驚きましたか？」
「ええ…少し…」
「無理も無いでしょうね。…世間で語られる『ジオン・ダイクン』像というのは、民衆の支持を得る為かなり意図的に作られたモノ…虚像だというのが…真相なのですから…。この事はたぶんシャアも知らない筈ですわ」
「どういう事ですか？」
「ジオン・ダイクンは政治活動…演説では天才的なカリスマ振りを発揮していましたが、その反面家庭を全く顧みない男だったそうです。デギン様の話によれば、結婚したのは子供…シャアが出来たからで、最初は全く結婚する気が無かったのを私の父と共に説得して籍を入れたそうです。ですから、実家へは殆ど顔を出さなかった人だと、私がシャア自身から聞きました」
「…」
「そんな家庭環境でしたから、シャアやセイラ義姉さんの心に深い傷があり、それ故に性格が破綻している部分があったとしても…ある意味仕方が無い事なのかも知れません…本当に…悲しい事ですが…」
「…そう…ですね…」
しばらく沈黙した空気が流れた。やがて、カイは話を逸らすような感じでこう言った。
「あ…．あの…ザビ家…に関する事をもう少し詳しく話しては頂けませんか？」
「ええ…。ではまずギレン様…あ…連邦が憎むべき相手に『様』を付けてはまずいでしょうか？」

ハマーンは申し訳なさそうに言った。
「いいえ。私は気になりませんのでご安心下さい」
「ありがとうございます。…ギレン様は目的の為ならば実の父親すら犠牲にする冷酷な心の持ち主だと思われるでしょうが、元々は無口で父親の命令には絶対服従するタイプだったそうです。また、一度仲間になった者には裏切りさえしなければこれ程頼りになる人もいなかっただろうとも言われてました」
「それは…俄には信じられない話ですね」
「ええ。私もそう思います。その彼が変わったのは、ジオン様が亡くなられて、デギン様がギレン様に今後の組織運営を託してからなのです。その時、ギレン様は席にいた皆の前でこう言ったそうです。『諸君。私は本来組織の上に立つ立場では無く、参謀としてその任務を全うする事が適任だと自負している。だが、指導者としての任に就く以上は、全力でその職務を全うするつもりでいる。さて、諸君も薄々理解しているとは思うが、現在の人類が今後も生存し繁栄して行くには余りにも数が多過ぎるという事だ。その為、人類全てに幸福をもたらそうとする行為がイタズラに行動力を鈍らせ、権力の集中が腐敗を蔓延させる原因となっている。それを解決するには人類そのものの数を減らすしか方法は無いとも言える。だが、その『死んでゆく』人類を選別する最適な方法は無い。つまり、理不尽な理由で決行する以外に方法が無いという事だ。だが、その理不尽な行動…それによって生ずる怨嗟の念を一人に集中させる事は可能である。…仮に私が今後の歴史で大悪人と記されようとも、志半ばで凶弾に倒れようとも、志を同じくする仲間が一人でもいるならば、その日が来るまで人類の未来をかけた戦いを続けていきたいと思う！以上である！』…と…。その場にいた皆は拍手で彼を称えたそうです…」

「あの戦争…一年戦争は私利私欲の為では無く、人類の未来を見据えた覚悟の上の戦争だったという事ですか？」
「ギレン様がどう心の中で思っていたかは判りませんが、父から伝え聞く限りでは…」
「では、コロニー落としの際、住人を毒ガスで虐殺した行為は…」
「毒ガスを生成して使用するコストよりも、開口部を破壊して空気を抜くだけで事は足りますし、人がいたとしても作戦は遂行可能です。それどころかギレン様はコロニーを兵器として使用する旨を事前にコロニー公社へ伝えていたにも関わらず、上層部がその件を握りつぶし、住民に伝えなかったばかりか自分達だけが我先にと逃走したという事実が記録として残っています。更に付け加えるならば、毒ガスを使用した事実は事実なのですが、脱出出来なかった住民を落下時の恐怖を知る事無く死なせてあげたいという判断で使用したと伝えられています」
「では、なぜあの行動がギレン総帥が認めた正式な作戦として後世に伝わったのでしょうか？」
「それは…現場の暴走を知ったギレン様が…その…全ての罪を自分自身が背負うという事で、事後承諾という形でですが正式な命令書を作成されました。勿論、独断でその作戦を遂行した部隊は厳罰に処されましたが…」
「それは…軍という組織である以上仕方が無い事ではないでしょうか？」
「そう…ですね。ギレン様は組織…いえ、サイド３の国民をファミリーという目で捉えていましたから、国民の幸せの為にどうすればいいのかと言う事を常に最優先で考えていました。民衆の期待を決して裏切らない指導者として、ギレン様はサイド３の国民から絶大な支持を得ていたという事は、紛れもない

事実です。もちろん、それはデギン様、キシリア様…ガルマ様…そしてドズル様にも言える事なのですが…」
「つまり…恐怖で民衆を押さえつけていただけでは無い…と？」
その言葉に、多少困惑しながらハマーンは答えた。
「確かにそういう面があった事は否定出来ませんが、それだけでは無かったという事です。もちろん結果が全ての事ですから、後から何を言ってみた所で気休めにもならないと思いますけど…」
カイは一呼吸置いてから続けてこう聞くのだった。
「実は…その件に関しての話なのですが…一年戦争が終わった際、ザビ家の独裁体制が崩壊したサイド３において、彼らを非難する声が驚く程少なかったという記録があります。それで地球連邦としてはジオン共和国を解体して民衆を離散させるよりも、出来る限り隔離して監視し、地球圏に残った残党は随時武装解除させて宇宙へ帰還させる政策を採用した訳ですが…」
「ええ、月や他のコロニー群も、地球政府と一枚岩という訳ではありませんからね。表向きは統一国家となっていますが、事実このサイド６の様に自治が認められてますし、各サイド内でも住んでいるコロニーによって細かい法律は微妙に違いますわ」
「その通りです。地球連邦も地球自体の運営だけで手一杯ですし、どちらかと言えば連邦に属して忠誠さえ誓っていれば、些細な事は大目にみるような風潮になってますね」
「はい。そんな状況ですからこのサイド６も治安が安定してはいませんが、私のような立場の者にとっては住みやすい環境だとも言えますわ」

「…仮にですが、ジオン…正確にはザビ家ですが…あの様に事を大げさにさえしなければ、一年戦争は回避出来たと思いますか？」
その質問に、ハマーンは少し考えてから、ゆっくりと言葉を選びながら答えた。
「それはどうでしょうか…。これだけの惨事にまでなったからこそ、結果的に…地球圏は見せかけだけとは言え平穏を保ってられると考えた方が妥当の様な気がします。それに…皮肉な話ですが、人工が減ったお陰で食糧問題も回避出来る筋道が見えてきた様ですし、地球圏の環境も回復傾向にあるというデータもあります。そう考えると人類全てが地球自体にとっては病原菌の様なのかもしれませんね…」
「その意見には私も同感です。それでも私達はこの世に生まれたからには死ぬ時が来るまで生き続けなければいけない…人というものは本当に業が深い生き物だと思います」
「そう…ですね。私も含めて戦争は人を狂気に変える…仮に人類全てがニュータイプになったとしても、人が人である限りその本質は変わらないと私は思ってます。戦争に代わる、国際紛争の解決手段が見つかれば…話は別ですが…」
ハマーンはそう答えると、返答に困るカイを見つめながらグラスにそっと口を付けた。

＊　＊　＊

その後ハマーンは自分が知ってる限りジオンでのエピソードをカイに語った。それはドズルやキシリアとのエピソードだったり、僅かなオフの時のギレンの素顔だったり、ガルマと遊んでいた時にデギン公が見せた末っ子に見せる父親の甘い顔だったりと、そこだけを聞けばよくあるファミリーの光景を話したに過ぎなかったかもしれない。彼らは本来裏方として人生を歩んでいたし、本人達もそれが自分達

の身の丈の人生だという事を充分過ぎる程理解していたのだが、歴史は皮肉にも彼らを表舞台へと担ぎ出してしまった。

それが偶然であれ、必然であれ、あの様な惨劇を生み出してしまった事だけは事実であり、人が生きている限り、それは親から子へと語り継がれていく事であろう。人類が次の惨劇を繰り返すまで…。

＊　＊　＊

エピローグ

そんな会話がいつの間にか一年戦争の話になり、グリプス戦での話にまで広がり、酒の勢いもあってか夜通し話し込んだ二人だった。そして、空が明るくなった頃、それはお開きとなった。

身支度をして玄関で別れ際にこう言い放つカイ。

「セイラさんの仲介が有ったとはいえ、私の様な者と快く話をして下さいまして、本当にありがとうございました」

深々と頭を下げるカイに、ハマーンは優しく答えた。

「いいえ。こちらこそ忘れかけていた事を思い出させて下さいましたし、セイラ義姉さんや、アムロの事も聞く事が出来ましたので、とても有意義な時間でしたわ。こちらこそ感謝してます」

「はは。そんな事を言われますと…悪い気はしないものですね。でも、私の仕事としてはこれからが本番ですから…。今回の取材をどんな形であれ後世に残してあげたいと思っています。なぜなら人々があの戦争を冷静に語り合う事が出来る様になった時こそ、今回の話は貴重な資料として生きてくる筈ですから…」

その言葉に、ハマーンは少し心配そうな表情で応えた。
「もし…今回の事を世に出す事で、貴方の身に危険が及ぶようでしたら、この話はお蔵入りにされても結構です。元々ジオン公国は戦争に負けましたし、その国がどうだったかという事を今更公にしたとしても世の中が変わる訳でもありませんし…。とは言え私が生まれ育った国…コロニーの記録が後世に残ると言う事は嬉しい事でもありますが…複雑な気持ちです」
視線を落とすハマーンに、カイは精一杯の笑顔を作りながら答えた。
「そんなに心配しないで下さい。私はもう何年もこういう事をやっているのですが、世間に出る本…話というのは、そういう運命を持っているものだと私は思っています。貴方が先の戦争で生き残り、私がこうして貴方に会う事が出来て様々な話を聞く事が出来たのも、偶然と言うよりは何らかの力が働いたのではないかと…私などは思いますよ」
「亡くなった方々が、私達を導き合わせてくれたとか…ですか？」
「どうなのでしょうね…」
「なら、そういう事にしといた方が、面白い人生なのかもしれませんよ」
「そうですね…。あと事付けなのですが…」
「どんな事でしょうか？」
「義姉…セイラ義姉さんにお会いしたら…また遊びに来てと伝えて下さい」
「判りました」
軽く会釈をして家を出ようとしたカイに、ハマーンは意を決してこう言うのだった。

「それと…お願いとも言えない事なのですが…貴方が私の義兄になって下さる事を…期待してますわ」
その言葉に、一瞬何を言われたのか判らなかったカイだったが、セイラとの関係を言われたのだと理解した瞬間、少し照れながらこう答えた。
「そう…ですね。私と貴方がこうやって出会えたように、私とセイラさんとの間に、そういう縁があれば…。でもお互い今の関係が一番良いように思えるんですよね…友達以上…恋人未満の様な関係が…」
「貴方にとって義姉は『手にすると壊れてしまう崇高な存在』という事でしょうか？」
「そういう事に…なるのでしょうね…。まぁ…何と言うか…女性に幻想を抱くのは、貴方からしてみれば『俗物』という事になるのでしょうけど…」
「ふふっ。私の世間的なイメージというのは、どこまでいってもその言葉に尽きるのでしょうね。私がアステロイドベルトでシャアとの主従関係を結び、彼によって作られた『指導者』としての仮面を被り、彼の演出通りの演技をして、グリプス戦まで戦っていた事を一体何人の人が知っていた事でしょう…」
ハマーンは懐かしそうな、そして悲しそうな表情をした。それを見て、カイはこう訪ねた。
「では、最後に一つだけ。質問させて下さい。グリプス戦後、シャア表舞台から消えた後、貴方は地球圏に侵攻してサイド3を奪還するという偉業を為し得た訳ですが、内紛が無かったと仮定して…その後どの様な戦略を考えていたのですか？」
「戦略も何も…あの時のネオ・ジオンの戦力では、あれが限界です。あれは地球連邦に勝つ目的で仕掛けた訳では無く、彼…．シャア・アズナブルが再び世に出るまでの時間稼ぎと、その時の為に『道』を示しておきたかっただけなのです。だからこそ、その真意を知った者達が反乱を起こした…という事で

すね」
「誰も好きこのんで『捨て石』にはなりたく無いですからね」
「ええ、私が民を狂気で縛るのは、地球圏へ帰還して、サイド３を奪還するまでと決めていましたので、例え反乱の目があったとしても、あえて黙認していたのは事実ですが…」
「…組織をまとめるべき人材がいなかったとはいえ…お辛かったのではないですか？」
「…全てはもう終わった事です。想像にお任せしますわ…」
ハマーンはそう答えると、ニコリと笑った。

アステロイドベルトでシャアと袂を分かちながらも、永遠の主従関係を結んだ以上、表面上はともかく心の奥底では決して決別する事が無いばかりか、彼の作ったシナリオ通りにマゾでありながらもサド役を演じなければならないという辛さに耐えた女性…。例えララアの代わりといえども、それを承知で彼を慕い、彼の欲望の捌け口として捨てられた女性…。本当ならばシャアを憎しみの炎で焼き殺したい所なのだろうが、それでもかたくなに彼を想い、慕う女性…それがハマーンという女性なのだ。

その関係を不健全だ、想いを吹っ切れば良い…と言い放つのは自由だが、ハマーンにとってはシャアという存在が全てであり、二人の関係は、もう好き嫌いを通り越した次元の話なのだ。仮に今後永遠に会えない状態になろうとも、彼女のシャアを想う心には全くぶれる事は無い…が、一時の安らぎを得る為に心の通い合う人（必ずしも男性とは限らない）と、永遠に終わる事の無い快楽の中に身を委ねる事

も時々ではあるが行っていたし、出資しているクラブ（会員制のＳＭクラブ）にヘルプとしてＳ役、時にはＭ役で参加する事もあった。

その詳細については今回のエピソードとは関係が無いので割愛するが、機会があれば彼女の口から語られる事であろう。第二次ネオ・ジオン戦争後の、ほんの一瞬平和な空気が流れた時の、小さな小さなお話である。

【完】